

韓国仏教研究の現状と新しい未来

韓国仏教の研究は、今や、国際学術研究者の最前線の関心の一つ、すでに熱っぽい視線を集めて久しい。

中国と日本の中間にあつて、地理的な特色以上に、どんな独自の課題があるのか、中央アジアの仏教文化に比べて、韓国仏教は今に生きつづける、北伝大乘仏教そのもの、インド研究にはじまる、欧米研究者にとって、最後の秘境といえる。チベット仏教と重なる所以でも。

第二次世界大戦が終つて、内戦の続く中国では、とても仏教研究どころでない。欧米の若い研究者は、主として日本にやってくる。あえて私事を言えば、私の初期禅宗研究は、この時期にはじまる。曾ての日中の先覚が、すでに処理済みの資料と、研究課題の再整理、総合に終始するほかなかったが、欧米の若い研究者には、それがむしろ新鮮であつた。胡適と大拙の成果は、今もなお難透の大公案である。

本格的な中国仏教の解明は、研究者の現地調査が許される、八十年代以後となる。きっかけはロンドンとパリの敦煌文献が、完全なマイクロフィルムによって、世界に公開されたこと。次でロシア、北京のものが公開されて、国際的な新しい敦煌学が始まるのは、九十年以後のこと。今はむしろそれらの成果の、総合的な洗い直しが必要。わが藤枝晃先生が主張しつづけた、二十世紀写本の問題がそれである。

韓国仏教の伝世資料を相手どる、私の関心と方法は、第二次世界大戦中のことで、当初は「禅門撮要」、「法集別行録」、「祖堂集」、「禅門拈頌集」など、珍しいテキストを写すのが精一杯であつたが、戦後同志の友人たちと、「祖堂集」の共同研究を始めて、次第にそれらの背後にある、韓国仏教そのものが課題となる。当初は何も判らないが、わずかばかりの先覚の成果と、同時代の日中仏教を調べるうちに、次第に判ってくることもある。それらの知識をふまえて、再びテキストを読みかえすと、敦煌資

料と共通する課題が、かなり多いのに気付く。私の課題と方法は、こうして次第に定着したことに、今も処女的な恥じらいと、内面的な誇りを感じている。

鄭在覚先生の御努力で、「韓国仏教全書」全十二巻（1979-1992）が出るまで、私は若い韓国学者に逢うたび、わが大正蔵や続蔵経に匹敵する、伝世資料の完全な集大成と、その公開をたのみつづけた。

始めて逢う金知見さんや、韓基斗さんに対して、私が最初に訴えたのは、宗密の「禪源諸詮集」百巻の発見と、その公開出版であった。「都序」二巻は、すでに大蔵経その他にある。百巻の本体は、今もお貴国の名山大刹に、眠りつづけているはずだと、私は熱っぽく語りつづけた。

北京大学の方広支さんが、敦煌関係の禪文献を総合し、組織的に整理して、「禪源諸詮集」百巻を復元しようという、魅力的で遠大な計画をもっている。すでに老境に入ってしまった私は、韓国と北京で同時に、「禪源諸詮集」百巻が出るのを、私かに夢みて醜を忘れるのである。それは決して私だけでない、世界の研究者の願いであるはず。

今、駒沢大学に留学中の、韓国仏教の若い研究者が中心になって、続々と発刊される研究機関誌に、一言を求められた機会に、私の平素の夢をつづって、日中韓三国仏教の、新しい未来を祝する次第である。

一九九九年三月十八日
花園大学国際禅学研究所にて
柳田聖山識す

企画の辞

日本における韓国仏教の研究は、既に古く 1900 年代に入ってから驚くほど活発に行われるようになり、以後 100 年になる。私が韓国留学生印度学仏教学研究会の論文集の編集の任に就いて考えたのは、こうした 100 年間の日本における業績を特集企画としてまとめることであった。当初、留学生の中に韓国仏教を専門にしたり興味を持つ者が余りにも少ないという問題に直面したが、一黙会長と圓忠副会長にも色々とお骨折りいただき、日本人研究者として石井修道先生、福士慈稔先生、佐藤厚先生、橘川智昭先生の 4 人と、韓国人研究者として曹潤鎬先生と私の 2 人が執筆することに決まった。様々な項目設定によって執筆していくのが理想的であるが、人数的にも限界があり、今回は禪、唯識、華嚴の専門分野と三国時代、高麗時代、朝鮮時代に分けることにした。

本企画に関しては計 6 回の会議が開かれ、その過程で各々の担当分野や執筆方針等について議論した。

まず担当分野については、石井先生、福士先生、橘川先生が、各々の専門分野である禪、三國時代、唯識をそれぞれ担当するという事は当初から決定した。他の執筆者はいずれも華嚴が専門であり、協議の末、高麗時代を佐藤先生と私、華嚴を佐藤先生と曹先生、朝鮮時代を私が担当することになった。最善の選択であろうと確信する。

次に、取り上げる論文の範囲については、日本国内で日本語或いは英語で発表された韓国仏教の研究論文に限定する。したがって、韓国人留學生の論文や韓国内で日本語で著された論文も対象になる。また韓国内で日本人が著した論文は、可能な範囲で取り上げる程度にした。

第三に、取り上げる論文の研究者名について、敬称は全て省略することで統一する。

以上の 3 点が基本方針となっている。